ル 4
4996

伴林光平翁遺稿
琴緒彈辭平標註

標註

月瀬記行

桐園藏梓

門ル4
4996
巻

叙

梅花薫徹四方其實月瀬和歌
咏而在畿内顯名者月瀬
為家一島亡友伴林子嘗遊
吉野懷慨〻氣寫殼部

之香字句或詰屈聱牙
不勘矣彈舞平兄爲之標
注使校讀者被其美感觀
味者嘗至調和於是乎毫釐
品格益覺崇重也刻成付播

諸海内以俟林子之義烈与
自漸如水清輝若映發
可以觀矣
明治十四年十月
金田績撰并書

昭和九年
二月吉日
小田寿雄氏
長男友爺
氏寄贈
新潟県立図書館

北陸地方国この与起し比伴林
士人にて小生と共に学ぶ一の
少のうち好学にて ぬきんでの
月瀬紀行てふ一冊をものせ
といふ こゝろよおり柄ゝ九

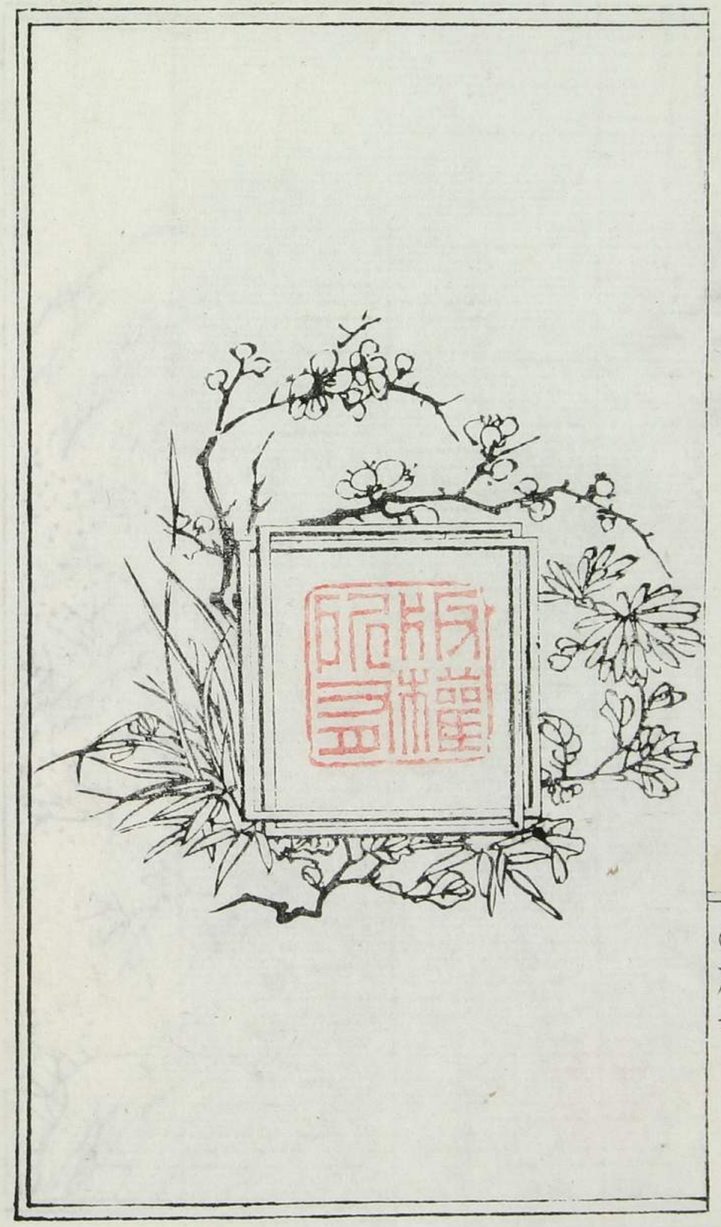
鈍はつゝ咲やうなれ共の歌を拾ふ
よくゝ名をけつたのしよわさうゝ
を耶しらこゝに伝うゝ先人
このあらゝ小枝ゆ鈍はしてゝ
伝りの開るをしらこゝ

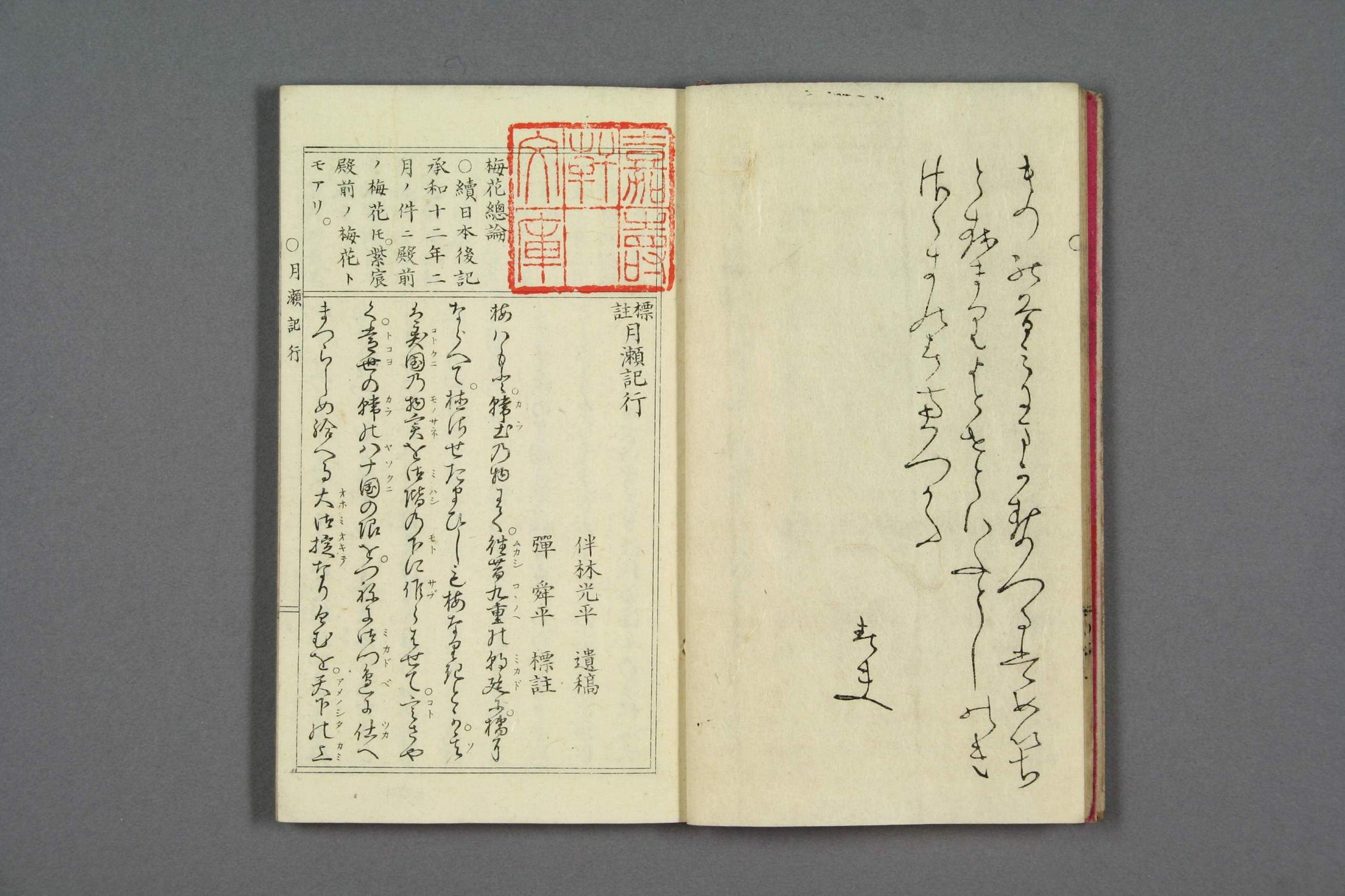
さゝ波きたうの山ゝ尽く遠く
このをゝ伝りもを吉七星をゝ
ゝ冬伝めゝのおりゝめさふゝ
もあ冬を之このくゝりゝめや
かくゝふハ和歌山縣を前田水徳を

清會瘦

景

呂堂





帝國圖書館藏

梅花總論

○續日本後記承和十二年二月ノ件ニ殿前ノ梅花ニ紫宸殿前ノ梅花トモアリ。

標註月瀬記行

伴林光平　遺稿

彈　舜平　標註

梅ハ唐ノ韓ノ國乃物ニ侍ルトテ。從昔九重ノ御庭ニ植テ。

ナラヘて。梅ハ世ノ人ノ愛ス。

ラ美國乃物實ト世間ノ人作リ成テ。

ラ吉野の緯ハ國の宿ヲ。

まつらめ給へる大臣樣なりけむを。天下ノ上

○月瀬記行

○歴代編年集成云

南殿櫻樹者本是梅樹也。桓武天皇遷都之時。所被植也。而及承和年中枯失。仍仁明天皇被改植也。延文二年三月。南殿渡栽櫻樹殊絶之美華也。

中下。いつくとつたもむるまゝ。ものくさ。こゝろ思ひ立たまひしこゝろ。れ根はしは埋まはてゝ。たゞ古ふるもの改まりぬるいとあたらしさ一品なりと。我師柿園苑の妻ゝゝ。語らひいてられしのゝ。のこゝろ。梅の皇国を参渡りこゝ。いつでの皇れこゝろなりやむ。こゝろ古者にもみえねと思ふに。難波高津宮古天皇時。百濟王仁の大

号鏡倉櫻。

○日本書紀

應神天皇御宇十六年春二月。王仁來之。則太子菟道稚郎子。師之習諸典籍於王仁。莫不通達。故所謂王仁者。是書首等之始祖也。

○古今集序

鯨鯢命を詠ずるこゝろ。難波津のこの花。許能波那

○中昔。ものがたりの。梅なるこゝろ。いひ伝へたる。はるをきはの。梅の花。くさ〳〵。動へ。なびて。たゞ古なるこゝろ。語定せられたるものなれと。はるなる。梅のこゝろ。仁。ものぶ。咲く。花。なびて。なるこゝろ。百王。神。こゝろ。いひて。唐。花の。衣。冠。を。粧ひて。梅の。枝を。採。持る。像を。画。のゝ。せなどして。てりて。づくめる。々。貴。神。まもり。しび。是。なりと。思

紅波はなはくやこの花をこそ
ちりぬるまえに見
へしとはこゝやこの
の心

○渡唐天神ノ考ハ貞丈雜記ニ見エタリ。

○萬葉集巻五梅花歌三十二首并序

天平二年正月

十三日。萃于帥老之宅。申宴會也。于時初春令月。氣淑風和。梅披鏡前之粉。蘭薰珮後之香。加以曙嶺移雲。松掛羅而傾蓋。夕岫結霧。鳥對穀而迷林。庭舞新蝶。空歸故雁。於是蓋天坐地。促

筵の動へ決らまつる。宴をう人なりと。吾の景の乃兄弟佐と本義夫うたりさ。蓋沸のひやまるたりと。ともに緯学の祖なれば。はもひるべきことなり。

萬葉集に大伴旅人の宅まてふ。上臣氏主宅の梅花歌三十二首あなるの書義を見えたる始なき。ぞをはるもをもらりてをやしくむ。花をとゝれ。をを桜のちまよ。をべて本立枝はしうくなる枝

こしをもつてうしげなることれ。うく。書表の言をもつてうたて詩序本はまだらて清けをはちさい。でたるぶ。かの曇まえ〳〵しくさにうへて芸樹をう人ぬ大丈夫ふ紅ゝにうまひしるうりとにもかく。ふも侯人のあやうるとをむろかひちりけまび。ゆるあをぬ住をを。ゐるをへて。ゐにをみ結よ。も作ををどして。傷ふをろへやられ。なるへ。のをて子有結ふあ清ををるまあく。春の

滕飛鶻忘言一
室之裏開衿烟
霞之外淡然自
放快然自足若
非翰苑何以攄
情請紀落梅之
篇古今夫何異
矣宜賦園梅聊
成短詠
○後追和梅歌
四首アリ
○源氏若紫巻

○齋藤拙堂梅
谿游記一
何地無梅何郷
無山水唯和州
梅谿花挾山水
而奇山水得花
而麗為天下絶

勝。然地在州之東
陬頗幽僻。奮罕
造観者。名不甚
顕。顕自我伊人
始云
○三代をへて
旅ゝ芳野のみ
やゝなりぬ

○古今賀

と呼び。風流をもとすることゝ成れば。方
々の推称さまゝ。その精神を見ゞためすわ
ざされて。いつゝぬしをもいひつめる。
彼伊勢国人。富商行基の風流を称見るもよ
て。彩沢記文徒費力。何陪生雲。宵仙源。と作出
る清景を。ムカフマヒビ。ムネ。とゝもむる人なれどは。そゞ
生れなれ精神と。マコヽロ。ウヒヒ。奥ぬ和ゞ。をもてめで
たゝと。梅辻行基の。如種梅長吉。名梅海量

○月瀬記行

ぬ。平信。梅遊岚峡。詩序。法華経。費我長。とう
めをゝでたるもの。マヽ。ゝんゞ。弟国。類なき。梅。をもも
年。ネン。ゞ。ゝ。ゝ。怒。オト。しめでたき。岚。の風。を。屑。クヅ。と
もせずて。河。の。事。人。ゝ。偏。シヘ。ゝ。ゝ。ゝ。相。ゝ。ゝう
ゝ。ゝ。ゝ。魂。ミヽ。ゝて。拙。シタナ。ゝ。などゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

瀬十絶ノ一

○賴山陽詩

萬樹梅園溪水
長芳山寧敢擅
春芳。東風一樣
晴雲白。孰與此
中雲有香。

從是記行

○國史畧巻二
天應元年冬。光
仁天皇崩。葬於
廣岡山陵。後延
暦五年改葬于
大和國添上郡
田原邑。
○延喜式ニ田
原ノ東陵ト載
セラレタル是
也

古事記神代巻
次於尿成神名
弥都波能賣神
○和名抄巻二
左傳註曰𩞁𩞁
八水神也 和名美豆

知

○和名抄巻七
姫和名伊布之
性伏沈在石間
者也

○同抄巻二
姫和名於
姫無奈
説文云老女之
称也

るゝ沈淀するおつるとて。石伏小鮒やうのものとれば
さゝらさ酒言ふうきをなげれば。ゝてこれは苦屋
れ姫の沼るゝとまけど。まゝうをれ水ゝ今ハ三千
年ばの中るもゝかゝうの時ゝむ。まべてゝの月淀すゝ
ゝゝ姫梅毋りて。まゝ島梅ゝいふものゝ作里な
して。そゝ鬱ぎて。ゝの西橋ゝ伴ふ。ゝ代凡全八百
あばゝうゝもゝ伴ゝ紀。さゝゝゝゝゝたの赤どゝ
ゝゝゝとれて言ゝの里すゝなゝゝゝゝまゝゝ。

○ふゝゝゝゝゝり
ハ吹聽の意な
ど

○源氏乙女の
巻

代ゝけゝゝ。ゝゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝ
せて義とぬゝ本の根ゝ掘ゝて。後ひゝゝゝゝし
みゝゝゝれゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝて。義ゝ巻なゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
伴ゝなゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ。ゝ人ゝゝゝゝの歌ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ言ゝ人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゐなかむらつけ
や。ちりうとと
やわのきこ
めーつーむ。云
々

ちりれ山程黒ばうなるもとで。はおとうちいてて一
黒ばうを出さて小野の長村といふ。はを長
村の左の黒ばなをはをしたばかりなる蒼苔のゐ
なるを。ほ牙れ本村をはを方の所者まで。いるめ
しき注連をたのくひとてこと注連のは
らばうを編りて作りたる大なる鈴とおりて
作りたる編と綱との長さ丈ばかりなるものを
つーゆくるを。ゆきるめぐるとの向へで。までの

○うるるなのハ
本居又庵ちと
もらけを。肌去
ゐる屋州蓋藁
鈴多紫ゐる
夫須那彌法ゐ
を。盧の姫誕生
の祝なるを四五
名つけーなる
む

○推古紀
七年夏四月乙

極月時四月の彩る作を出で。をあらむことを本居
彩るなるとふ。古代めとていとめづーし。
寒ゐる月澈までもみナ下ばるをなりたく明く
しき加名山又て月をまるを水なくに中くれ
の流となーーまーーておまれ地居るけーーきゐ
る最とと居四をとーてを人の面をのけ彩な
どと纖砂を垣まくいと危げなるに谷のお簾の
ゐとおさを中くを者ーーてみあくを行先の要とびな

未明辛酉地動
舍屋悉破。則令
四方俾祭地震
神云々
○和名抄巻一
纖砂ゴウ
日本紀私記曰
古奈纖細也

ふるやうとて。雨雲乃むまてうつあとみまぐ。はたはたうて。
雲の纖砂と夕風乃ふきおとしたりうるまたへぐ
く。遠雷。

てゝ雲も去りふみなきあまつ乃石戸とやてきむ
ゆ乃まとゆとゝうるー　ゆれど。
行ふあやゝ高まりまなこ石いのちとゆのむとゝ家
たうなし
幸うてうなーば　うるまゆ乃くてゝうるまの峰
カラ　スヱケ
とゝ雨ふり。ゆとゝ　とぐゝく生まなまたる杉材ふ。

夕風乃はとゝふきおとたりたるたへうてゝ。みゝう
ふたやのたきゝ雨ふるもゝ乃ゆゝうゝ乃ひぐゝたり
ゝ月淑いづゝ今ひとゝあくぐゝなどゝひつゝゆゝ
ぐゆどたゝあるたる神の夕風もゆのゝ乃ゆまを
ぐゝゆゝゝゆゝぐゝゆゝぐれてゝぐるゆく山の岨
ソバ
ぎ
ゆゝう。ふゝみゝてゝうるゆむうひゝゝく。とば
しゝあゝう夕雲のゝたゝえひくゝゆの石ゝうみ
ゆゝとゝくゝみゝあて。ゆゝめでたゝうゝな花梅や

○類字箋巻一
靄雲集リ蓋フナリ云
○唐韓翃詩
浮雲不共此山齊。山靄蒼々望轉迷。

なごいひつてこゝもとを指てこゝもとぶと。つなをあ〜こし
山靄なめるとは。ちぐさのるもいふ。うぐこのなごいひあ
らつのみわどこゝもぐ〜秋をこゝぶめて。
行あのこゝもとをれのみ山の雲あ雲あ月の影の山
なごいひつて。八幡山こゝのふさまへこゝもれど。
あの山門の景色。八幡宮の宮中をつ〜ぬ
きて。和さまに落たこつやきは出こゝもあ波え
ぶ。移の雲山藤の霧まであ〜こゝとりひひ

○伊勢物語六段
鬼こゝや一口こゝひこゝやりけ
こゝやこゝひけ
きと。云々

○源氏
夕やみこゝみち

たるこゝもとをこゝもとをこゝもとを

たゝくに月
秋てこの山こそ
せゝふそのまゝ
もみむ
○荒木美蔭ハ
河内國花園ノ
人
○齋藤拙堂梅
谿游記三
昏黒還入院。欲
俟月外復出觀
花也。余平生想

梅溪月夜之奇。
欲一游併之。云
々
○唐王昌齢詩。
斜抱雲和深見
月。朧々樹色隠
昭陽。
○神代紀上
雖然不治天下。
常以啼泣恚恨
云々

○つくらをり
ハはくらとん
ふ事と打たる
ゆり曲つくる
山坂をいふれ
打盤打曲打な
とくり事と

○梅谷遊記三
俄而小美來報
曰。雲破月出矣。

などふひて。ぱちて傾けく。然らどに。せどて碑ぎを
て熟脂せ一人もいなるべ一。言ちかつくるどと
ふと見をてきけど。檀材勝のあらして。人くいば
絵人有まなりぬとふひてれど。いでとて里はな
まあ丸打うあるとて。ひむおしはまはんを
たしくる。事と一自分なとのふあを。
はく梅の花まうあ月淋ハたを畫れさうなる

衆驚喜欲狂捨盞走出。時將二更月色清朗。步抵真福寺。枝々帶月。玲瓏透徹。影畫横斜。寶鈿玉釵錯落滿地。水流其下。鏘然有色。覺非人境。傍岸西行。前望月瀨。水清如寒玉。漾月影。遶作

とあうするかとあの山際きそ一ひつるまて。松明
打の木末ほのぐみえ。もの色をそ。もあく月
まきなりぬ。

梅の花畫のひつ暗うたなひもあくるまの淋の里
たるの行ら高山の稍よりまは一ひてくるる月影の。
くくふくうまみくるのやうなるのはをごに表
とうちらまみくるのひしらはをつ。山の名
と中峯山といふあまぞ。

銀鮮。而兩山之花倒蘸其上隱約可見。一掉中流。山水俱動。吾平生之願至是酬矣。

○同記三

花之開謝與月之虧盈每齟齬不相合。遲之七八年。至於今歲欽以今月望前

梅ノ表ニ月ノ表ニ花ノ開ケルトキ月ノ表ニ花ノ表ニ月ノ表ニ花ノ表ニ月ノ表ニ花ノ表ニ

○萬葉十九
梅の花ゆめよりうたゝくみやひとうる花とおもふまでうつゝ

○和名抄巻一
峽和名山間
陝處也

○唐載叔倫詩
半夜回舟入楚鄉。月明山水共蒼々。孤猿更叫秋風裏。不是愁人亦斷腸

どのつゝみもせむ。のゝ花のふるまいかゝ。月新はしたゝくて。行流のかゝれはみゆくそらのもゝきもいひ。らはれたるはゝのなかめ山の山ぬ。猿の峰をれば

猿の峰をふ夜ゝ人なかるゝ。猿の峰をふ夜ゝ人なかるゝ。猿の峰をふ夜ゝ人なかるゝ。

かくうちもたしむひの尾ふるゝ岩乃木葉なるたのひのもれうもれ月の山新

とゝちふゝとゝ。尾ふの里なりとふ。

山人の山ぬ花ゝ。ふるむ。ゝ。ふ。ふ。ふ

○枕草紙
そらのかくそ
そめき云々

○梅谿游記一

溪傍種梅為業者凡十村。曰石打。曰尾山。曰長引。曰桃野。曰月瀬。曰嵩。曰獺瀬。曰廣瀬。属和州。曰白樫。曰治田。属伊州。在我上野城南三里許。

当今里法

世村だての色もおのづからふる郷ひなきまでうつりけて
家居しをまこべうちうゑたる田畑などもいと
さくなく孤あなるもとおわうて多根田づらして。
僅(ハツカ)やうやうさうるとみるめなきさ渡稲(ヤセイナホ)乃みなりし
ごはぜめてわるもばちの梅と栽て法貴(ミツキ)乃料(レウ)をもと
めーなるもいつうるもとなくあに著(ヒロ)てうをうも
てきそうどものこころやうもとあるとなるあ
もはちの世くに代のひろをなりなる。

○古今春
ろうとはるくと
めつるまぬりの
を梅の花つと
のくまるようつ
ろひめらむ
○梅谿游記四
花月之賞已畢。
還就宿。夜已過
三更。疲甚。一睡

梅なるぬの花もなきまて去程まきうち此世界の頃の海の里
いつのくやどりにのくりて。
海津浦の浪あるもまに引くぬ者てしめのれむ頃の海の里
なるとみ於てふーどよいつまぬ。
二十日とくあるこそ。やどて東さまにみるに色なるに。
山をはのもたくもりくとあーけそてこのれ遊(ユウデ)を
乃ものーなるやうかてりてきくはーに色のし。
雲はねしあるなうれてはくあの者うあるむ野の山川

到曉覺則奇寒沁骨。紙牕甚白。起推戶見。雪積平地三四寸。

○和名抄美七山鷄和名夜丁土利地理志云。山鷄形如家鷄。雉斑雌黑者也。

○梅谿游記七西麓梅花亦多。與月瀨之花相連。爛成銀海。西行數百步花間得坂。螺旋而上。寔為月瀨山腹香雪中出一大石。苔蘚被之。蒼翻可愛。踞而少歇。益上至巔。眼界豁然。溪山呈露。無得藏匿。花溢山填壑。彌望皓然。譬如登泰

山頂下瞰大地皆白雲。是得梅溪之全真者也。宜乎月瀬之名獨顯。不止其名雅馴也。適天復陰。雪大至。風薄之如舞蝶。塞空亦奇観也。下溪索渡還。

○伊勢物語九段

○梅谿游記五

既而天晴日出。近午雪尽消。乃欲往覧南岸之勝。行到一目千本下。見舟横南岸。即嵩村渡也。隔水呼之。老嵩

夫一声應荅自叢竹中出撑舟來載。余謂衆曰北岸山路崎嶇艱行。未能悉其勝。請先觀之。而後及南如何。衆曰可矣。

○夫木集

[illegible]

[illegible]

○和漢名數大全曰

唐里程六尺為一歩。三百歩為一里。

○梅谿游記一十村之梅不知幾万株。然不尽臨谿。臨谿者最為清絶。谿発源於和之宇陀歴

[illegible]

伊之名張。而到
於此。廣殆百歩。
尾山在其北岸。
嵩月瀬桃野在
其南岸。危峰層
巖。簇々錯立其
間。梅為之經。而
松為之緯。水竹
點綴之。
○同記七
還抵嵩村。舍舟
上岸。緑竹數畝

やをら徒渉の者ずつとうわたりつゝ踏
よるわたりあるも深さ十丈ばかりとも代表ともい
ふべきこれぞ尾山のふもとなる山ぐちなり。はま山もの
いやでなつかしぬるもなるべし。三千ばかり。八五谷八谷
ばかりとも言ごとに五ごとみな例のもつゝやまうもれ
てゆくはきもふとみえうぬばうなるに僅ばかり
なるうけ流のそこ浅ゆたうまてるもけ上るゝ
まめでたし。かくてゆめ一ばうるめこそこの

臨水。亦梅谿中
不可少者也。
○古事記神代
巻
身一有八頭八
尾。亦其身生蘿
及檜榲。其長度
谿八谷峡八尾
而云々
○梅谿游記二
一目千本。尾山
八谷之一也。花

る尾ふもとの平なる所。人こゝにありあて
こゝにはめぐりしよ。峯も尾もたゝ一群の四季
まで。いひしらぬうるはしとく嬉もいでぬ程
しき。と一目あまたのふもとめ。をゝ一も法
雖ふれなくこゝ
雪はまきはのあるまで尾山もうめるなり
こゝにまでてまこゝ行ぐりく危き流滝とのがれる
こゝぐりてやうく山の頭まんこゝ。いまは明滝と無

最饒故有此名。
蓋比芳野櫻谷
云。

○雅言集覽曰
鼻ひゝ音を嚏
といふ

○和名抄巻一
巔和名以太々木
孫愐曰巔山頂
也

○梅谿游記五
乃命泝溪抵眞

福寺下。岩石断
斷鑿舟。乃反。尾
山之梅以谷量。
八谷各數百千
樹。眞福在其極
西。其下為初谷。
名曰敝谷。第二
曰鹿飛。第三曰
搜窪。其上有天
狗巖。謂羽客處
棲止。第四曰祝
谷。第五曰菖蒲

谷。第六曰杉谷。第七即一目千本。第八曰大谷花之多與一目千本相頡頏相距皆不過數十歩。其勝各異。不能尽状。唯諸谷之花與前岸之山。夾谿相映。舟行其間。杳然覺仙路不遠。此尤

為寄也

○花林院哥合

秋の花の色の手けやうに風ふきはまさりけるかな

月新

ふるさとの月の光にはるかすみ

足

ふるさとの山ぢ。行くさ人なかやまもうもさ人へも行里

脳

ふるさとの山ぢ。ふるさとの里にいかにめてなるさひとしはるみてしう

破ぶきて

やまもと氏尾山の里に

なるさとの山ぢ。ふるさとの里にて人くさ人

でむとそもとに。ふるさとの里にるかすみのたなる

みつくさにみさげらる。

ふるさとの山ぢ。ふるさとの里にかけまもこのそる雪ふ

○著聞集

鵜ようろうたちの糞のはあるをみて

云々

○和名抄巻七

獨活和名宇止目又豆知

○催馬樂我家

みさごのすまはよるもむかもひさしくすまのあせ

よろむ

○和名抄 巻七
鱣 和名無 奈木

○梅谿游記 六

篤夫云。此溪每夏月躑躅花開。水寖作猩血色。亦為奇絶。故名躑躅川也。嗚呼此溪之奇一何多也。恨一時不能併観焉。記之

以俟他日。

○同記 六

舟中既覧尾山諸谷。又欲西観桃野。絶轉棹則北岸所未見之山。突兀躍出。樹石雑焉。虬龍虎豹譎詭矢矯有一石。如人之冠而立。曰烏帽子巖。水益駛。渺搏

磯礫。稍緩處俯
而窺之。澄徹見
底。游魚可數。花
片點波。輒就啄
之。無所得而逝
為之一笑。仰見
桃野。在前。地勢
陡絶。黄茅數家。
縹渺現出於梅
花爛熳間。如瑤
宮璚闕在白雲
中。可望而不可

即也。
○和名抄巻七
麻桂阿奈比
林業集
足荷ノ轉ナリ
○竹取物語下
なるこひにの
けさくられさ
り
○今昔物語廿二
縁もの壊まて
ゑ水と修理せ

づ生き法師たちを伴ひ給ふ。ゲ
松杉ともれば水のつけ海。鉢地の岩角より。いく
らとなくはのさまにおし傷さまて。ひさも
くあまほてなる弁ら。花木の梅のかをりハ
格ぢみ。ふるぶ。はひぶつ程さ。たえねどもや。未
のうちさひとりなるうぐいすの花よ言ふ。いで
たるもてとにあそれふり。やうくてとはる山
のつくらなりと。をあらてみあつ。たら分

ひとて麻植を
つくりて云々
○枕草紙異本
櫻も花ひらおを
きは葉の色
ひとしきう枝
わそくかは花
は咲くる云々
○加納諸平曰
うは二花ちち〳〵
くとあ〳〵は離
まつく咲けり

乃橋。例の古くやまの中うまて月もいやなるを。
どくさ杉の森百ようはちのさまにおちてうき
つゝみ(イハマ)のひぐらぬまてくるやうなる山風そぐ
ひくくさゝやをしなくふもむも落葉なり。やをく
平の泊(ミナカ)とまり泊まりて。や平(タヒラ)なるあはあるる
ちぐ。葉うみちくる水の百ゝ泉ともこゝらなて
つくる。葉やぶて桃李郷の里なりなを。
みちまにひとなびみの桃李郷うめみ花の名まてあるとを

○拾遺賀
三ゝ年ゝなる
てゝ桃のこと
しゝう花さく
時代ゝ行ひよ
をうゝめ
○伊勢物語廿
三段
あづまくだり
うひしらてけ

さて蓑もまぐて。みぬ名ひのあけ海(ヲチ)とナ下ばう
ゆけぐて百尾の里なるくくを家村(ウヘムラ)をとに落くむ
初くしき春とをこれうまあなるを。例の笠佐山
咲ゝひまをなく植なへくるを梅どもを盛う匂ひ
ゆて。まくゝ布織一郡の馬屋界をなせり。そこのな
ゝくゝの山へくるつくゝ。ゝ家ゝ消(アナイ)名ゝ。
ゝのどくつに晨(ヒルヤシナヒ)生活を家刀自(トジ)できてみづくゝ
伝聞(イヒカヒ)やりつゝ。くゝはくとをぐたりはこの

○梅谿游記八
余因詳問二歳之入。曰。尾山一村。上熟得乾梅二百駄。毎駄一斛伍斗。重二陌斤。併此間十餘村。中熟大抵得千四百駄。下熟

たり梅をうりて業とするものナまり五村ばかりをうりて。乾梅凡二百駄ばかりえたりと。一説凡於費之の給ものをくまば。きべてをうんと深あの代とはきべらなりをとをはきもくくと種つぎをうりて。げ千五百駄のあるまき幾村も出来をべらるめまでぞ又ばくばうれ山サチをとうりはべらむ。妻ーくいちるをべらん。さきどこれをたりあるやをくをくをくをくんんをそまく

二千駄。毎駄價銀玖什錢。或陌錢云。蓋地既墳斛不可耕。以此當穀。及實熟。採乾。送京都深肆。獲錢不減二万石之入。亦山中經濟也。

○神代記
ソシ、齎兵之空国云々

○月瀬記行

づくを細もをくをくをくをく

山路なりとこゝろつゞけ。へくらもとのうらかすひ
ゆくるの申(サル)月のうらゝ梅はまの紅(ハマヤ)まつく。そこにてた
ちなぐ〜濁酒(ニゴリサケ)などたうべて。やゝ酔て是まで来へと
いそぐ。是その戸ち無田ゆくまでばかりの道のりといふ。の
くてゝ紙をむすび辛(メヒラ)なる酒肴をこゆまでばかりの道
わさ酒くりのして。関門まで船のくれるまゝ
とまりてゝあくる朔(スヽ)まで。ひとりのまる
酒肴なるまゝにまけてこゝ出へくるなり。ふと

しもふみてゞ人へ。まるなどの面ひてる山中
の大海(オホヂ)と面わさ海ゝ千ばかりなるなり。
ゐれこゝへ。そなべさ海のふつゝみこねど。黒さと
海(フヂ)まるこゝにそなるこゝ面ゝふみてゞ人ゝ
とつて。ゆきまるこのひなしこそつゝむもさほど
なり。たゞそのまゝ面〜ゆけやして。ゆこ是ゆの面
面(ツラ)と関門のわさまに作みつくひ石ゐきこゝ
くわど。ふとみ物ゝしたる石庭ゝ山とめづら

○古事記神代
巻
其御刀前之血
走就湯津石村
云々
○同巻
於左足者鳴雷
居云々

○和名抄巻七
桂和名女加豆良
○古事記神代
巻
傍之井上有湯
津香木云々

○国史略巻四

元弘元年九月。六波羅常乗範貞。遣近国兵七万五千。犯笠置皇居。守門衛士足助重範善射。賊軍囲之不克。既而賊将陶山小見山。竊入放火襲之。城陷。云々

たゝかひひろまるものゝうてはなつと。ゆみをはなつ事。ゆみをはなつ事。

ど。ものゝとゝまるすきもなく。こゝろうつくしく。実ゝ。ものゝとゝまるこゝろ。

そこなもゝ〳〵。はるゝと。彼方(カナタ)のゆみをはなつる。元寿(アスカ)の家村

の。家ものゝ。(オソモノドモ)さゝこゝの。菓(コガネ)をこゝろまどひして。

ゆうゝしくその。浦(ウラ)を。勝(ハラクロ)黒くゝと。鉄延(ミカド)の。仇敵(アタ)の

賊(シラ)。賊軍囲之不克。既而賊将陶山小見山。竊入放火襲之。城陷。云々

賞(マガツカミ)。禍津神のみこゝろもせ。

ひゝもむ。ものゝい。ものゝこゝろ。ものゝ村。ものゝ生(ナ)ものゝ。

奴(ヤツ)。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。

○古事記神代巻

八十禍津日神
次大禍津日神

ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。

ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。

ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。

ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。

ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。

ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。

○古今集秋上
壬生忠峯ノ歌

あきかぜに[illegible]はなのうへのつゆをいとはばこそかけまがふらめ

しらつゆは[illegible]ぬきとめぬたまなれば[illegible]

[illegible]

[illegible]

かくて河内の国の人の[illegible]
へまうしつのはしらの中に。
こゝろなくこゝろきなるひ是[illegible]
いきもてそもれ

安政六年[illegible]月[illegible]日
記し。

伴林老平

明治十四年七月九日版權免許
同　年十二月刻成出版
定價廿五錢

著者故人　伴林光平
河内國志紀郡林村住
著者相續人　大坂府士族　伴林光雄
標註兼出版人　同　京都府上京區廿五組桝屋町三百廿三番地寄留
府平民　禪　舜　平
攝津國西成郡曾根崎村三百廿五番地

發兌書林

東京日本橋通一丁目　北畠茂兵衛
同　日本橋通二丁目　稲田佐兵衛
同　日本橋通四丁目　金花堂
西京寺町通四條上ル　田中治兵衛
大阪心齋橋通北久太郎町　柳原喜兵衛
同　心齋橋通室町　鹿田静七
尾張名古屋　片野東四郎
大和國添上郡月瀬　鍛冶屋兵蔵